

Newsletter

第4号 Vol2.no1

グローバルインターンシップ推進拠点の形成(G.ecboプログラム)
 —10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

発行日:2009年7月

目次:

夏期派遣選考	1
事前研修	2
課題発見セミナー	3
リスク管理セミナー	4
2008年度冬期派遣 学生帰国レポート	5-7
活動予定	8

G.ecbo Day開催

2009年4月6日(月)13時30分より、G.ecbo グローバルインターンシップ派遣学生募集説明会(G.ecbo Day)を開催しました。教員ならびにスタッフ9名を含む40名が参加し、日英で行われたプログラム紹介および内容の説明に、興味深く耳を傾けていました。後半は、昨年度派遣された学生とのフリートークの場を設けました。参加学生たちは、自分が行きたいと思っている機関・会社に派遣された先輩学生に、積極的に質問をしていました。先輩学生が、自信を持ってプログラムの経験を話している姿が印象的でした。



2009年度夏期派遣学生決定

今年度夏期派遣学生の募集を行い、2009年度夏期G.ecboプログラム派遣学生として25名の学生がインターンとして派遣されることが決まりました。

【2009年度 夏期G.ecboプログラム派遣学生】

柳楽 真太郎(先端物質科学研究科) 重川 瞳(国際協力研究科) 渡邊 耕二(国際協力研究科) Nisha Kumari(国際協力研究科) 尾崎 崇(国際協力研究科) 谷本 修一(国際協力研究科) 土屋 善之(国際協力研究科) Siau Jia Jia(国際協力研究科) 松山 匡延(国際協力研究科) 飯山 慶(国際協力研究科) 長尾 浩介(国際協力研究科) Luciano Freitas(国際協力研究科) 桜井 一真(先端物質科学研究科) 古野家 孝行(先端物質科学研究科) Shazwin Bte Mat Taib(国際協力研究科) 小池 輝幸(工学研究科) 川上 健太(工学研究科) 羽奈 洋介(工学研究科) 仁科 晴貴(工学研究科) 徳原 晋一(工学研究科) 牟田 和貴(工学研究科) 佐伯 祐太(工学研究科) Niraj Prakash Joshi(国際協力研究科) Luni Piya(国際協力研究科) Lee Hyo-jin(国際協力研究科) 計25名

G.ecboプログラムとは？

インターンシップを中心に事前研修・事後研究を通して、既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適應できる研究者の排出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

事前研修

G.ecboプログラムでは、インターンシップ研修を柱として事前研修および事後研究からなるサンドウィッチ教育を行っております。今回はサンドウィッチ教育の中の事前研修である、英語プレゼンテーション研修、派遣先へのアプローチの一つであります英文履歴書および研修計画書執筆について、今年からスタートしました課題発見セミナー、そして毎年渡航前に開催しておりますリスク管理セミナーについてご紹介します。

英語プレゼンテーション研修

この研修は、派遣学生の英語コミュニケーション能力とプレゼン能力の向上を目的としています。毎回一人10分程度の内容をPPTファイルで準備し、英語で発表・質疑応答をします。

プログラムでのインターンシップ経験のある先輩博士課程後期学生たちがTA、RAとして、これからインターンシップに派遣される学生の指導補助にあっています。

今年度夏期学生はそれぞれ3グループに分かれ、下記の通り実施しているところです。

第1回:「自分をアピールしてみよう」「派遣国について紹介してみよう」	
内容	自己紹介と志望動機等の発表 発表者の趣味や専門、経験等に基づき自身を表現する。インターンシップ参加の動機について発表者の出身地(県・市町村)について発表。
第2回:「研修先の機関紹介、インターンシップの具体的な目的・計画について」	
内容	派遣予定国・都市の社会経済情勢・文化等について 研修先の機関の紹介(機関の概要、機関として何を目指しているのかetc.) 自身のインターンシップ計画(研修先での研修・研究内容や、自身の現在の研究との関連性について) 派遣先で行うことの大まかなスケジュールの発表。
第3回:「これでファイナル!!派遣国で私たちがやっていくこと」	
内容	事前に派遣先とコンタクトを取り、より具体的なインターンシップ計画、 研究計画、派遣期間中の具体的なスケジュールを発表。



事前発表最終回では、インターン先での研修内容がテーマとなっており、発表学生たちは、指導教員・担当助教と受入機関の担当者からのアドバイスを受けながら、具体的な研修内容を詰めて発表に臨みます。こうして発表の回が進むにつれ、インターンシップの事前準備が整っていくように構成されています。

英文履歴書、研修計画書

現地でインターンシップを行う前に、派遣先に英文履歴書を送付します。海外の履歴書は日本の履歴書と違うところも多くあります。たとえば、日本の履歴書は市販の定型用紙に手書きして記入しますが、海外の履歴書は自分で紙やフォーマットを選び作成します。ですので、自分の長所や技術をいかに強調するかがカギになります。アルバイトや課外活動、社会活動などを、今までの自分が経験したことを総動員させ、履歴書を作っていきます。一度書いた履歴書は、項目を付け足すことによって一生使うことができます。

また、期間の限られたインターンシップを最大限効率的にすすめるために、あらかじめ派遣先に研修計画書を提出します。何をやりたいかを具体的に書くことはとても難しく、特に外国の機関に派遣予定で、英文で研修計画を書かなければいけない派遣学生は苦闘しているところです。



平成21年度開設新規プログラム

課題発見セミナー

ケース・ライティングを通じた分野横断型課題発見セミナー(I)、(II)

2006年のプログラム開始以来、帰国後の事後研究やインターンシップで得られた知見の蓄積・共有の部分においてプログラムの強化が必要との認識が高まっており、インターンシップでの活動を経験・体験のレベルに留めることなく、分野及び文化横断的視野を醸成させる機会とし、かつ、より高次の知見へと昇華させ、蓄積していくための教育方法をどう確立していくかということについて、議論していきました。この議論の中で、インターンシップ等で得られた体験・知見を反省的に振り返り、その文脈を出来る限り捨象しない形で記述していく可能性を持つ手法の一つとしてケース・ライティングが取り上げられ、事後教育への導入の検討がされることとなりました。こうした流れを受け、ケース・ライティングに重点を置いた事後研修プログラムへの発展を目的としてセミナーを企画・試行を目指すこととなりました。

セミナーの目標

- ・開発途上国を模した状況を疑似体験することにより、現実の世界の要因が複雑に絡み合う様子を体感するとともに、そこから注目する問題を切り取る方法を体得します。
- ・インターンシップ後、本セミナーを通じて参加者が行った個々の活動を省察させることにより、参加者が置かれた環境の中での課題を明確化します。
- ・同じ状況を疑似体験した他分野の参加者の事例(複数の視点)に触れ、議論する機会を与えることにより、将来学際的複合・融合分野に取り組んでいく際に必要な複眼的思考態度を涵養します。

(課題発見セミナー(I))

セミナーの概要説明とケースメソッドの紹介 1コマ / ケースライティングの実体験 1コマ / ワークショップ(アフリカルチャーゲーム) 1日 / 構想発表 1コマ / ドラフト発表 1コマ

(課題発見セミナー(II))

期間: セミナー開始から課題提出まで約1ヶ月半
内容: インターンシップ中の体験をケース化します。

広島大学大学院国際協力研究科
組織的な大学院教育推進プログラム

第一回課題発見セミナー
アフリカルチャーゲームワークショップ

開催日時: 2009年6月13日(土) 9:00~(受付8:30~)

場所: 国際協力研究科1階大会議室

費用: 900円(受付8:30~)

主催: 国際協力研究科

協賛: 国際協力研究科

お問い合わせ: 国際協力研究科 国際協力推進課 国際協力推進係

アフリカルチャーゲームワークショップ

2009年6月13日(土)に国際協力研究科において、課題発見セミナーの一環であるアフリカルチャーゲームワークショップ(参加人数は夏季海外インターンシップ派遣者12名を含む24名)を実施しました。セミナーの運営には埼玉からICnetのスタッフ3名が来られました。

アフリカルチャーゲームは、参加者全員がアフリカの小農家の家族の一員になり、役に応じて農村生活を疑似体験します。ゲームは一年ごとに進み4年分実施しました。今回は8つの家族が、それぞれ生き残りをかけてゲームを進めます。子供の世話が大変で作物を収穫できないと、栄養失調になりますし、子供を学校に行かせてしまうと、人手が足りなくなります。病気をすると現金が必要になり、銀行に借ると利子がつきます。現金収入を得るために、出稼ぎに行ったりもします。

一日をかけておこなったゲームですが、アフリカの農村で生活をする事の難しさを実感し、またどうすればよかったのかということ振り返ることによって、見えてくるものがたくさんありました。



アフリカルチャーゲーム参加者の声

限定された条件の下ではありましたが、途上国の人たちがどのような状況でどのような気持ちで生きているのかを、かなりの現実性を持って体感できるものだったように思います。問題点のあり方をドナー側ではなく、生活者の立場で抽出できる内容で、参加者には非常に教訓的な経験だったように思います。セミナーとしてはまだ半ばですが、ワークショップの目的は十分達成できました。(国際協力研究科・肥後靖教授)

丸一日、村に住む家族を演じていた参加者は、厳しい条件下でどうやって生き残るのかに没頭しているようでした。その過程で、「赤ちゃんを大事にする」「子供に教育を受けさせる」といった先進国の価値観が、条件が変わるといかに脆いものか実感されたことと思います。私は、オブザーバーとして全体の流れを観察していましたが、それでも退屈する暇はなく様々な発見がありました。10年以上の歴史があるゲームならではのノウハウが満載され、健康状態が悪いときの病気のリスク設定など細かい部分に至るまで配慮の行き届いたプログラムであったと感じています。今後、留学生の多いIDECでさらなる活用を図るには、村の住民だけでなく援助する側の役割を設定するなどの工夫が有効かもしれません。(国際協力研究科・高橋与志准教授)



人生ゲームのようなスタイルで、内容そのものが意外で有意義でした。考えれば考えるほど難しくなって、安心して挑戦できる基盤(資金等)がないので、リスクを冒すことが怖く、日本では心配しなくてもいいことを気にするようになったところが新鮮でした。(参加学生)

リスク管理セミナー

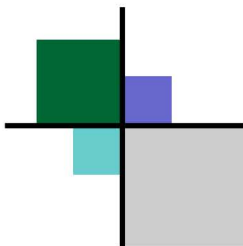
2009年6月25日(木)総合科学部にて、全学生・教職員を対象としたリスク管理セミナーを開催しました。授業終了後の遅い時間ではありましたが、海外渡航を控えた88名の学生および教職員が参加しました。セミナーでは、海外渡航する前の心身の準備として、海外で頻発している日本人を狙った犯罪のビデオを鑑賞し、それぞれの担当者から一般的な留意点、保険について説明がありました。また保健管理センターの日山医師からは、無理をせず体調を管理すること、そして渡航先では様々な感染症が流行っているの、あらかじめ予防接種をしておくことを推奨されました。内容は以下の通りです。

1. 開会の挨拶(G.ecboプログラム拠点委員長 藤原章正教授)
2. 安全対策について
 - ・外務省ビデオ「なぜ君がねらわれるのか」
 - ・渡航について全般的な注意
 - ・海外渡航にあたっての健康管理について(保健管理センター 日山亨医師)
 - ・保険について(AIU)
3. 質疑応答



活動報告 2009年度4月-6月

4月6日	G.ecbo day 開催
4月9日	前期授業履修開始
4月20日	夏期海外インターンシップ公募締切り
4月27日	夏期海外インターンシップ面接、選考
5月11日	夏期海外インターンシップガイダンス
5月18日 19日	2008年度冬期派遣学生帰国報告会
5月25日	英語プレゼンテーション研修開始(3グループ各3回) 国内インターンシップ公募締切り
6月1日	国内インターンシップ面接、選考
6月8日	課題発見セミナーガイダンス
6月13日	課題発見セミナー アフリカルチャーワークショップ開催
6月25日	リスク管理セミナー開催



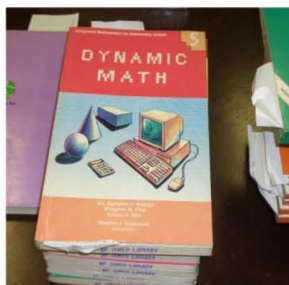
2008年度冬期派遣学生 帰国レポート

岩知 秀樹 HIDEKI IWACHIDO
杉野本 勇気 YUKI SUGINOMOTO

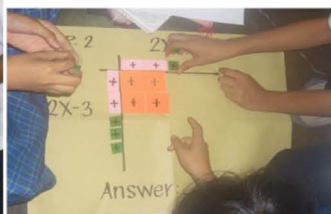
派遣先	UPNISMED フィリピン大学理数科教師訓練センター
研修期間	2009年2月16日 ~ 2009年3月16日
研修内容	授業観察(小学校、中等学校)、授業研究(Lesson Study)、授業研究後の教師へのインタビュー、カリキュラム分析、教員研修への参加

Impression of Internship

フィリピンの教師の質が低いということは、行く前からある程度聞いていたことでしたが、それを肌で体験できたことはいい経験になりました。この改善のために参加した授業研究や教員研修は効果的があると考えられますが、教師の意識が高いようには思えませんでした。もっと意識をしてそれをおこなうべきであり、これが教師の質の改善につながると考えます。これはフィリピンだけでなく日本も同じことです。教師の質を上げることは必要不可欠なことです。日本では、学会等も良く開かれるので、教師が実践的な側面ばかりでなく、理論的な側面を強化することも必要でしょう。



フィリピンでは国の政策により、数学、理科等の授業においては英語の使用が義務付けられています。マニラ地域の現地語であるタガログ語では、数学的な記号や表現、言葉自体がほとんどないためです。英語に接する機会が多くなるので、英語力の向上には貢献するようには思います。英語で学習することで、式の読み方などは英語の文法に沿った形であるので、言葉と読み方などにギャップは生まれにくいですが、数学と現実を結びつける中で、身近でない英語を仲介にすることは、小学校、中等学校レベルでの発達段階には適していないように感じました。また授業者の準備



が十分できていないため、「英語を用いた数学の授業」というより「数学を用いた英語の授業」という印象を強く受けました。数学を学ぶことで得られる興味・関心や楽しさを理解させる授業の必要性を感じました。

Advice to next internship student

NISMEDの寮で生活していたので安全でした。食事は寮の食堂でしていました。主食は米で、それに合うものなのでとてもおいしいですが、甘い辛いの2択が多いです。またサラダがないので野菜があまり食べられません。

休日はSMという大衆デパートに行ったりしました。なんでもあります。どこに行くにも、ジブニーを乗りこなすことが必要です。乗り方の説明は、みんなが何度も説明してくれるので、大丈夫です。寮の受付のおばちゃんがとても親切で、困ったことがあると対応してくれますが、ちょっと変わったところに行こうとすると、止められました。

派遣先のスケジュールに合わせて、積極的に研修に参加していくことが必要だと思います。自分の専門外のようなことでも、興味をひく内容を行っていたりするので、とりあえず参加してみるのもよいと思います。また自分の調査研究に関してやりたいことは、どんどん要求していきましょう。こちらからアプローチしていくことが大切です。



2008年度冬期派遣学生 帰国レポート

池田 剛 TSUYOSHI IKEDA
片岡 義久 YOSHIHISA KATAOKA

派遣先	JICAインドネシア
研修期間	2009年2月14日 ~ 2009年3月15日
研修内容	JICA事業の見学、スラウェシCDプロジェクト・マルク州アンボンでのプロジェクトの見学、関連現場視察、データ収集、意見交換

Impression of Internship

多くのJICA専門家の方々にご協力いただき、修士研究に関してのお話を伺うとともに、研究に必要なデータを入手させて頂きました。専門家の方々は、役所の中に実際に入って仕事をなさっており、インドネシアの役所に入って仕事をする難しさ、特に、データの取得・管理・情報収集は、本当に難しいのだなということを再認識しました。「役所の中で、どこの誰がデータを管理しているのか分からない。データの質自体も簡単に信頼することは出来ない。システムの移行やオフィスの移動に伴ってデータを紛失してしまう。」そのような現状になっているのは、データを収集・管理することの使命、あるいは目的意識が組織の中で共有されていないことに原因があると



考えます。日本での常識や感覚とインドネシアでの常識や感覚との違いを認識したうえで、思考および行動することの大切さは徳丸様より教えて頂きましたが、ここでもその違いに驚くとともに、これが今のインドネシアの現状なのだろうと感じました。マカッサルでのインターンおよびここでの研修を通じ、途上国で情報やデータを収集するためには、正式な手続きも重要ですが、キーパーソンやコンタクトパーソンとのコネクションを作成・維持することこそが重要であると強く感じました。逆にいえば、信頼できる関係が結べていなければ、信頼するに足る情報を得ることは難しいといえるのではないのでしょうか。また、チリウン川を視察した際には、ジャカルタから高速道路沿いに進む宅地開発および上流集水域の開発の進展、河川に投棄される生活ゴミ、川から発せられる異臭、そして、その川の近くで生活し、河川水で衣服を洗濯する人々を自分の目で見ました。穴が開いたまま改修されていない歩道も見ました。自身の研究が、どれほど彼らの生活を向上させるために役立つかは、現時点では分かりませんが、少なくともあの場所に生きる人々のことを忘れず、研究に取り組みなければならないと思っています。

Advice to next internship student

事務局が拠点にしているホテルに滞在していました。休日はパーティに参加したり、事務所の方から紹介いただいた食事所にタクシーを使って行ってみたりしていました。受け入れ機関といつどこで何をするのか調整をきちんとしておくことを薦めます。あと、研修先での服装、靴、お土産などは早めに準備しておくこと。現地の方々にお世話になり、時には想定外のシーンに遭遇することもあると思うので、ちょっとした日本のお土産を用意しておくと思われと思います。常に、ペンとメモ帳はポケットの中に入れていつでも出せる状態にしておきましょう。また、整理整頓をよく行い、どこに何が入っているかを意識しておきましょう。



2008年度冬期派遣学生 帰国レポート

Anwar A.H.M. Mehbub バングラデシュ出身

Host institute	ICLEI-Local Governments for Sustainability member office in Surabaya, Indonesia
Period of internship	February 16, 2009 to March 23, 2009
Research arena	Evaluation for the Changes of Travel Behavior on Car Free Day: Emission Savings through Modal Shift Analysis



Impression of Internship

This overseas internship was a very broadening and rewarding experience for me. It was very enlightening for me to be able to immerse myself in a field level practice for 5 weeks. It was my opportunity to think creatively and took ownership of my work. I was enormously fortunate to be given this opportunity to really reach out and broaden my research and practical knowledge in this way. There are few ways to gain real-world experience in the classroom. But internship is the better way to gain the real world experiences from the grass root level. G.ecbo internship program has equipped me lots to achieve the professionalism in my research arena which was beyond my imagination before pursuing internship. As a master student in IDEC, I was trying to enrich my research notion with discovering the insight vehemence of the local people to solve the problem of traffic induced emission and I realized very relevant ideas to improve the emission condition through internship. I have been furnished with experiences that have made me stronger. In additionally, I have obtained some other benefits. Firstly, my work ethics have been increased; secondly, I am now more confident about my abilities and thirdly, internship has also allowed me to learn about the time management, discipline, and effective communication skills. On the other hand, I have been accomplished the advantages too from my overseas internship in context of exchanging the two-sided exposures, establishing an intertwine relationship between two countries, to learn the other country's social image, norms and values and launching a collaboration between the guest and host institutions.



Advice to next internship student

Since most of the personnel in host institution are full of activities, therefore you have to be obviously conceptualized your work by yourself. You will be guided very infrequently because of their time limitation. As a result, you need to be more confident on your own work. But please feel free to ask them regarding any difficulties of you. Please try to converse more and establish good liaison with other interns and resource persons to build a potent human network for your future career development. On the other hand, before departure please make sure your accommodation and please never forget to take enough dollars as sometimes you will be so crazy to buy some fabulous souvenirs. Please prepare your umbrella if your attachment is in rainy region and take care of your health .

Life in Surabaya

If you are relaxed from the bed early in the morning, you will discover a serenity and peaceful environment over the city and most of the open spaces are full of inhabitants to enjoy the aerobic dance with superb music especially on Sunday to keep health well. With a wide variety of social and cultural activities, water sports and other activities, vibrant nightlife, delectable Indonesian cuisine, friendly people and close proximity to an abundance of way of life opportunities, Surabaya is sure to have what you are looking for in a lore location. But please never forget to take care of yourself when you will cross the road and please take care of your belongings also when you will move around. Nevertheless, Surabaya is a wonderful place to spend time in – the people are very friendly, democratic, tolerant, smiling and like in helping each others. Though it was 'rainy' there during my internship the weather was nice, and I faced some problems with a language barrier but it was manageable in the end. Not difference with other parts in this world, the difference of rich and poor could be happened in Surabaya. But each of them could live side by side peacefully and it's not a reason to live uncomfortably.



2009年度前期TA・RAの紹介

フォローアップ教育の一環として、過去にインターンシップに行った学生をティーチングアシスタント(TA)リサーチアシスタント(RA)として雇用しています。プログラムで得た経験を各研究科の後輩へ引き継ぎ、事前研修および事後研究、そしてインターンシップの相談役を引き受けるなど、プログラムを支えています。



カ石 真 (博士課程後期3年)
国際協力研究科開発技術専攻
2005年度派遣(インドネシア 日本工営)
英語プレゼンテーションを中心に研修の指導をしています。



高松 森一郎 (博士課程後期1年)
国際協力研究科教育文化専攻
2007年度派遣(フィリピン UPNISMED)
課題発見セミナーのサポートをしています。



Phetkeo POUMANYVONG (博士課程後期1年)
国際協力研究科開発政策専攻
2008年度派遣(タイ UNESCAP)
留学生のサポートと英語プレゼンテーションの指導をしています。



事務局編集後記

活動予定 2009年度7月-10月

英語プレゼン最終発表(7月)

海外インターンシップ壮行会(8月)

インターンシップ派遣(8、9、10月)

派遣先教員訪問

冬期派遣学生募集・選考(9、10月)

G.ecbo Day 開催(10月)

帰国報告会(10月)

課題発見セミナー後半開始(10月)

後期事前研修開始(10月)

1年ぶりに職場復帰したKです。2006年のスタート当初はほぼそと8人の学生を2つの派遣先へ送るサポートをしていましたが、今や派遣先も人数も増え、今年の夏は17機関25人です！事前研修も充実し、教育プログラムとしてしっかり機能してきました。現在2009年度夏期派遣に向けて、学生が準備を進めているところです。私も一緒に行きたくりますが、それをぐっとこらえ、学生がいろいろな思いを胸に大学に戻ってくるのを楽しみに待っています。(G.ecbo事務局K)

次号予告

- * 2009年度夏期派遣学生の報告
- * 課題発見セミナー後半
- * 2009年度冬期派遣学生選考結果
- * ECBO修了生からの声
- * 派遣先企業からの声 他

10年後の自分を探そう
世界と出会うインターンシップ



Explore your future through Global Internship.
Join the G.ecbo program!!



広島大学大学院国際協力研究科G.ecbo事務局
〒739-8529
広島県東広島市鏡山1-5-1
電話 082(424)6950
Email: iecbo@hiroshima-u.ac.jp



ホームページもご覧下さい。

<http://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo/index.html>

